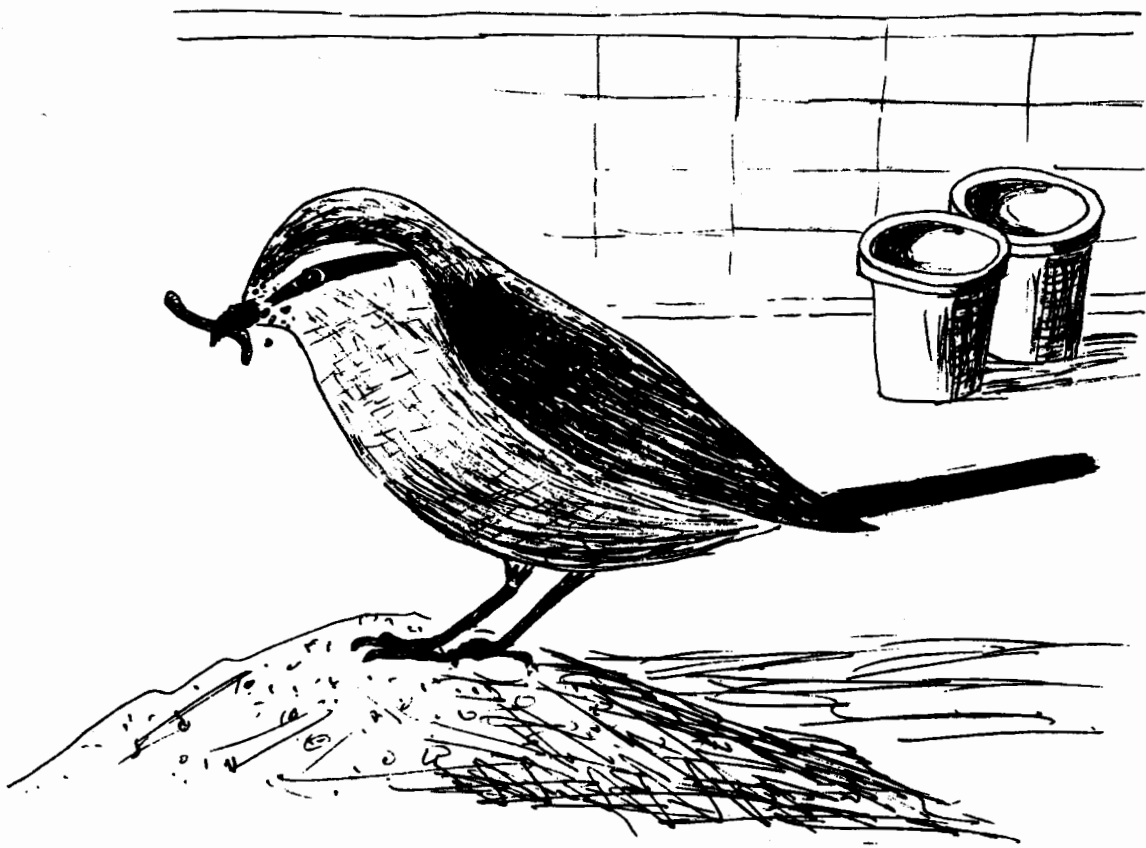


しんせう

第38号



2003年
(財) 日本野鳥の会

2月
三重県支部

ジョウビタキが私の家を訪れたのは昨年の10月12日だった。いつもより10日も早い冬鳥の到着に気をよくしていた。私はいつもツグミの初認日でその冬は寒い冬になるか、暖冬かを予測している。もう20年以上この法則でその冬を予測してきた。ジョウビタキが10日も早くに初認日を迎えたので、今年の冬はよほど寒いのかなと思っていた。ツグミで記録をとっているのに、ジョウビタキでもツグミと同じことがいえるのかどうか確かめてみようと考えた。案の定今年の冬は厳しい冬だった。

このジョウビタキ、オス、かなり人をおそれない。ジョウビタキはだいたい人をあまり警戒しないがこの鳥は特にその傾向が著しい。カメラを構えていると、もっと大きく撮ってくれといわんばかりに近寄ってくる。朝はいつも洗濯竿の杭に止まって私を待っているかのようである。10月の中旬はまだツバメも居残っており、ツバメとジョウビタキがその杭に入れ替わり立ち替わり止まっていたものであった。

よし、この鳥なら、丁重におもてなしすれば一冬楽しみを与えてくれるかとも思いバードフィーダーを設置したのは11月も末になってからであった。それまではどうも庭のミカンの木にあわらについたカイガラムシを食べていたかに思われる。実際、カイガラムシを食べているところを私は観察していないが、いやにそのミカンの木の茂みに潜んでいた。ジョウビタキはカイガラムシを食べるのだろうか。どなたか観察記録があれば教えてもらえたらと思う。

まあ、とりあえずバードフィーダーを家の前の畑に取り付け、ミルワームを毎朝やり続けた。こんなに人をおそれないとこれはひよっとすると私の手の上でえさを食べるようになるのではと思ったくらいである。約1.5メートルまで近寄るとさっと飛んでしまいが、そう遠くまで行かない。近くの春エンドウ豆の柄にと父が畑に立てかけた木杭のてっぺんに止まる。私がフィーダーから少し離れるとまた、やってくる。こんなことを休日を楽しみながら2003年を迎えた。

目次

今月の表紙 絵：高 和義

- 巻頭エッセイ・今月の表紙・・・1
- 支部活動のページ・・・・・・・・3
- 会員のページ・・・・・・・・7
- 探鳥会報告・・・・・・・・9
- 編集後記・・・・・・・・11

モズ
今月の表紙

1月初旬バラの鉢土を交換していると、1羽のモズ(♀)が目の前の上へ繰り返し飛んで来て、中の虫を食べていた。直径2.5cm高さ2.5cmの鉢の一つを調べて見ると、ミミズ3匹、カナブンの幼虫1匹、ハサミ虫1匹が見つかった。よくモズは冬に備えてハヤニエをすることが知られているが、これだけでは不足で、危険をも顧みず全ゆる機会に餌を採っているようだ。

高 和義

正月休みもゆっくりとこのジョウビタキとすごした。3月までは楽しませてくれると思っていたのもつかの間、我バードフイーダーにモズが居つき始めた。初めは、新参者らしくジョウビタキの後でお残り頂戴といった感じでなかなか好感が持てた。謙譲の心得のある珍しいモズだとしばらく思っていたが、次の週の日曜には完全に餌台を占拠してしまっていた。私が餌台にミルワームを置くのをどこかで必ず見ている。ジョウビタキはその後おこぼれを頂戴するという逆転現象がいつのまにか起こっていた。

しかし1月15日ごろまでは、餌台はジョウビタキとモズの共同使用となっていたが、やっぱり獰猛なモズ、ある日ヒバリの死体を片足に握り締め、モズがやってきた。私の姿を見たモズは、獲物を地面に落として飛び去ってしまったが、そのヒバリを検死してみると頭部がない。これまで、ウグイスを襲っているモズを観察したことがあるが、獲物にしてしまっ、運んでいるのを見たのがこれがはじめてである。ちなみにモズは小鳥を襲撃した場合、たいてい頭を先に食べるそうである。〔沢村私信〕運良くカメラを持っていたのでこの決定的瞬間をフィルムに収めることができた。

1月13日にいつもどおりジョウビタキやモズに遊んでもらっていると、事件が起こった。隣の家の屋根の棟瓦の2メートルほど上でチョウゲンボウがスズメにホバリングしているのを偶然観察した。チョウゲンボウが屋根のスズメにホバリング？こんな観察例はない。よく見ると（裸眼）いやに翼の下面が白い。それにチョウゲンボウよりひとまわり小さい。尾羽の先端にくっきりと黒帯がある。（この間10秒くらい）これはチョウゲンボウではないと一瞬頭にひらめいた。上面の小雨覆いは明るい赤褐色。チョウゲンボウのようにひらひろと飛ばない。住宅の間を戦闘機のように精悍に飛ぶ。これはチョウゲンボウではない。すぐ凶鑑を見る。「あああ、まさか、ヒメチョウゲンボウ。」結局未確認に終わっているがヒメチョウゲンボウでしかないという結論に達した。こんな事件があった。

話を餌台に戻すこととする。2月に入り、もう完全に餌台をモズが占有している。ジョウビタキはいつのまにか姿を消してしまった。モズの餌食になってしまっていないだろうと自分を慰めている。

3月までいっしょに仲良くやろうと思っていたジョウビタキが姿を消した。原因はモズに決まっている。よし、かすみであるモズを捕まえて、一応大義名分をつけるために環境庁の標識をはめて、捨てに行こうかとも考えた。いわゆる捨てモズだ。と考えたが、標識調査マニュアルでは「捕獲鳥類は標識装着後に特に理由のない限り捕獲地で速やかに放鳥しなければならない。」とある。きわめて個人的な理由で「捨てモズ」にしてしまうのは標識調査員の資格を失うことになるかもしれない重大違反事項になる。まして、焼き鳥になんかして食しようものなら、野鳥の会永久追放になる。そこで諸般を慮っていやいやモズと付き合うことにした。

私が「捨てモズ」をあきらめるとモズはだんだん近づいてきた。これまでは、餌台から5メートル以内に私が近づくと飛び去っていったが、今は、2.5メートルまで私が近寄ってくるのを許してくれている。私が庭に姿を見せると、まるで巣立ち直後の幼鳥が親に餌をねだる「羽ふるわせ」をこのモズがする。

これまでは「羽ふるわせ」はたんにヒナが親に餌をねだる時やコートシップの行動様式かと考えていたが、このモズの羽ふるわせを観察して、この行動は単に狭い意味での「餌ねだり」の意味だけではないのではないかと思うようになった。人間に対しても「羽ふるわせ」することはどんな行動的意味があるのだろうか。人間社会では、単に擬人的に「ねだっている。」という捉え方をしてしまいがちであるが、これはあくまでも、人間の思考過程が考えた結論であって、それが鳥類の行動と合致しているとはいいがたい部分がたくさんあると思う。

この「羽ふるわせ行動」は、その鳥の欲求が満たされそうで満たされないという状況の時にこういった行動をするのだ

ろうか。それが同種間でのコートシップディスプレイ時のメスの場合(カワセミなどでよく見られる)育雛 時期の幼鳥などでよく見かけるがどうであろう。このモズのおかげで色々と動物行動についても考えをめぐらせることができた。

今日もモズが餌台で「羽ふるわせ」をして私を待っている。

次の私の観察課題はいつこのモズが繁殖の旅立ちをするのかという点である。20年ほど前に、早春3月17日にもう巣の中に孵化後1週間ほどの3羽雛のいる巣を見たことがある。逆算すると3月10日に孵化、2月25、6日に産卵ということになる。

この原稿を書いている今日は2月11日。

編集部の三村さんからの催促のメールで今日一挙に書き上げようとしているところだ。そんなに早く繁殖するモズといわゆる「高原モズ」との関係は? など色々と観察課題を与えてくれた今年の私の庭の鳥たちだった。



第2回博物館シンポジウム
～放課後博物館のすすめ～

これからの博物館のあり方を探るために、平塚市博物館における「放課後博物館」の考え方と活動を紹介し、また、嬉野町が現在実施している町史(自然編)にともなう調査の概要などを報告します。

日時: 2003年3月9日(日) 午後1時～5時

会場: 中川コミュニティセンター(嬉野町中川927 TEL0598-42-5574)

駐車場あり 近鉄中川駅から徒歩5分

主催: 嬉野町・嬉野教育委員会・自然系博物館をつくる会

共催: 日本野鳥の会三重県支部

後援: 自然観察指導員三重連絡会

問い合わせ: 嬉野町史編纂室 0598-42-4073

川北均(県環境部) 059-224-2574

入場無料(申し込み不要、当日ご参加ください)

プログラム

①あいさつ 1時～

②報告「嬉野町の自然・生きものを語る」1時20分～

休憩

③講演「放課後博物館のすすめ～平塚市博物館の経験から～」2時30分～

④総合討論 4時～

閉会 5時

● 支部活動の記録

事務局まとめ

● 支部活動の記録（12月～1月）

2002年

- 12・1 2002年度第3回理事会開催
- 12 支部報「しろちどり」第37号発行・発送作業（編集部・津地区）
- 12・21 亀山市中央公民館が催す講座へ講師派遣
- 12・22 第10回野鳥密猟問題シンポジウムへ保護部長他1名参加

2003年

- 1・5 保護部会
- 1・15 県委託ガン・カモ類一斉調査（研究部）
- 1・15 県中勢用水・環境部へ支部長・事務局長挨拶回り
- 1・20 (有)ゼロへ情報誌「シンプル」について申し入れ（事務局）

● これからの活動（2月～3月）

- 2・ 支部報「しろちどり」第38号発行・発送作業
- 2・1～3 第16回バードウォッチング案内人研修会へ2名参加
- 2・16 2002年度第4回理事会
- 2 2002年度県委託調査事業の報告書作成・提出（研究部・南勢地区）
- 2 来年度の活動計画立案作業
- 3・9 第2回博物館シンポジウム～放課後博物館のすすめ～
- 3・ シロチドリ保護活動

第10回野鳥密猟問題シンポジウム

テーマ「密猟鳥の行方～私たちにできること～」報告

西村 泉

2002年12月22日・23日、第10回野鳥密猟問題シンポジウムが、東京で開催された。環境省をはじめ各都道府県の関係者、野鳥の会各支部、関連団体など約120名が参加した。

はじめに、日本野鳥の会の小杉会長が、10年前に40年来の悲願であったカスミ網の販売・所持が禁止になったことを振り返りつつ、現在では中国から数多くの野鳥を輸入・販売している状況を憂慮し、野鳥保護に全力を尽くしたいと話された。

日本野鳥の会保護室から「バードウィーク全国一斉野鳥販売実態調査2002の結果」が発表された。調査は、全国38都道府県175名より、482店舗について行なわれた。この内、野鳥を販売していたのは255店舗で、報告された野鳥は356種（5,259羽）であった。日本産と同種の鳥94種2,786羽のなかで圧倒的に多く販売されていたのは、メジロ、ホオジロ、オオルリ、ヤマガラだった。ペットショップで売られる野鳥には、「鳥獣輸入証明書」なる書類が添付されているが、これは任意団体が発行したもので、法的な根拠はないという。

日本にはメジロの美声を競わせる「鳴き合わせ会」があり、これに国産メジロを輸入メジロと偽って、1人2羽以上の国産メジロの違法飼養が絶えず、愛玩飼養制度が違法行為の隠れ蓑に使われているという。

また、「種の保存法」の国内希少野生動植物としてオオタカなど日本産の鳥類と同種も販売されており、国外産の亜種については規制がないため違法ではないが、日本での外国産鳥類の飼

養が、外国の野鳥の乱獲で生息を圧迫し、それが逃げ出した場合、生態系に悪影響を与える「外来種問題」を引き起こすおそれがあると指摘した。

今後の対策として、愛玩飼養制度の廃止、種の保存法の国内希少野生動物は同種の輸入を禁止すべき等を含めた6項目を提言した。

山階鳥類研究所の茂田氏は、輸入証明書のついた外国産の鳥と、日本産との識別法が確立されれば、輸入の真偽の確認が可能となり、違法飼養・捕獲を防止する有効な対策になるとして、識別鑑定の最前線を報告した。

獣医師の中野氏は、猛禽類の販売状況について独自で調査を行い結果を発表した。中野氏によると、近年ハリネズミや鷹匠ブームの影響で若年層を中心に需要が高まり、フクロウ、オオタカの輸入販売が増加傾向にあるという。

さらに、作家の遠藤氏は、驚くべき中国の野鳥市場と輸出の実態を報告した。(詳しくは、遠藤公男著「野鳥売買—メジロたちの悲劇—」講談社をご覧ください。)

他に支部からは違法な飼養や捕獲の摘発事例が紹介され、その摘発のポイントとして、全国野鳥密猟対策連絡会の事務局長である中村氏は、違法性99%のみに絞り証拠を提供し、いかに正確に警察・行政を動かせるかにあると指摘した。

また、環境省は、鳥獣保護法改正と中国からの輸入規制について説明し、来年度の予算に野鳥の流通・利用実態に関する調査費が盛り込まれたと報告した。

このあと、発表者と参加者が自由に活発な意見交換が行なわれた。参加者から輸入鳥に対する足輪装着の義務付けについて質問が集中したが、遅ればせながら環境省は来年度の予算のなかで、足輪装着の可能性を検討すると明言した。

まとめとして日本野鳥の会保護室の小南氏は、飼い鳥のための密猟ゼロに向けて、輸入規制の強化、流通管理、取り締まりにおけるNGOと行政との連携、専門性の確保、普及・啓発などの世論づくりなど5項目を重点的に取り組むべきだと提案した。

最後に、野鳥密猟を根絶するため、参加者一同さらに力を注いでいくことを決議して閉会となった。

※ 野鳥の飼養・販売・輸入の問題点

現在、すべての日本の野鳥は、国内の法律「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」においては、勝手に捕獲したり、販売したり、愛玩飼養する(ペットとして飼う)ことが原則的に禁じられている。ただし、メジロ、ホオジロについては1世帯あたり1羽まで飼ってよいとする愛玩飼養制度が存在する。

また、外国から輸入された野鳥の販売・飼養については、特別に定める種類以外は規制がない。そのため、オウム類などの外国産の野鳥をはじめ、日本に生息する野鳥と同じ種類の野鳥も多数、輸入され販売されている。この野鳥の輸入が様々な問題を引き起こしている。

☆ 2月9日の夕方、NHKのニュースでメジロの鳴き合わせ会の様子が放映されたことについて、三重県支部は「鳥獣保護及び狩猟ニ関スル法律」に違反しているおそれがあり、違法行為を助長させるとしてNHKに対し強く抗議しました。

☆ 野鳥の密猟摘発にご協力ください。

これから野鳥の繁殖期に入るため、密猟行為などが活発になってきます。あっ密猟!と思ったら、少し離れた場所から警察へ「110番」して、その場所を詳しく伝えてください。(その際、本人を決して刺激しないようにしてください。)また、野鳥の違法飼育や違法販売に関する情報もお寄せください。

三重県支部事務局 TEL 090-1566-6010

密猟110番 <http://www.tatsutomi.co.jp/mittairen/>

理事会つうしん

< 2002年度第3回理事会の主な内容 >

日時：2002年12月2日（日）

場所：津市総合文化センター（男女共同参画センター）にて 11名出席

1. 提案・協議事項

●編集部

- ①「しろちどり」における新入会員の紹介は、名前と地区だけを記載する。
- ②広報活動の一環として「しろちどり」を県立図書館に置く。
- ③報告「しろちどり」の発行と予定

●企画部

- ①販売事業について
運営面で無理のない程度で継続する。
- ②室内例会（地区）
開催したい地区は支部長が出向いてはどうか。
総会の後は親睦会（全体は年1回）野鳥講座は夏に開催してはどうか。

●保護部

- ①北勢地区開発問題 調査を続けて、猛禽類の専門家に相談する。
- ②安濃町溜池改修問題 解決
- ③木曾岬干拓地問題
フォーラムを開催した。今後の方向を決めて取り組む必要がある。

●中部ブロック会議

2003年6月14日～15日 菰野町
北勢地区を中心に運営

●事務局

- ①緑のネットワークみえ・自然環境創造協会への入会について
様子をみて検討する。
- ②拡大生産者とデポジット制度導入を求める国会請願団体署名運動署名に参加する。
- ③「鳥獣保護及び狩猟の適正化に関する法律施行規則（案）」に対する意見募集
環境省へ意見書を提出する。
- ④2003年度からの活動方針について
来年度総会で検討してもらう。
- ⑤バードウォッチング案内人研修会（本部企画）への参加について
支部から派遣するかたちで、支部から交通費・研修費を全額補助する。
年2名程度 伝達講習を行なうことが条件

2. 報告・連絡

- ◆ 腕章・チェックリストの作成、管理について
各地区10枚づつ用意 探鳥会の担当者に配布 地区長が把握・管理
- ◆ 第10回野鳥密猟問題シンポジウム in 東京・2002への参加
- ◆ 「自然公園条例の改正」について意見募集
- ◆ 県・第6回獣害対策学習会について
- ◆ その他

※ お詫び・訂正します。
ご案内の探鳥会の開催曜日が間違っていました。
正しくは、3月8日（土）宮リバー公園探鳥会 です。

志原川探鳥会（続き）

熊澤 英樹

中井氏の誘導でふたたび集合場所へ向う。集合場所の近くの電線にムクドリが20羽止まっている。よっぽど栄養が良いのか、他で見るムクドリより太い。飛べるのかと疑いたくなるほど。年配の方と勝手に、あれはイシヅカ、あれはマツムラ、その次はイジュウインあれはパイヤなど、話しているとクマザワもおるぞ「クマムクドリや、どや」と松阪弁、ひげが笑っている。あーあ、新種作ってしまった。もっと多くの鳥が出たが文中割愛させていただいた。この日、出たのは次の通りである。

チョウゲンボウ、スズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、ルビキ、ホオジロ、ビンズイ、タヒバリ、カワセミ、カワラヒワ、ウグイス、キジバト、トビ、ノスリ、ハヤブサ、イソヒヨドリ、キセキレイ、ハクセキレイ、クイナ、ハシボトガラス、ハシボソガラス、コサギ、アオサギ、ヒバリ。29種であった。この他中井氏から送られて来た過去に見られた鳥の種類はものすごく180種近く上げられる。

しかし、何か足りない。以前河口近くで見掛けた（志原川ビューティ、勝手に名前付けている。）河口からガサガサして出合った極めてコンディションの良い雌のオオタカである。他の参加者と再会を約束し別れを告げる。

直後、中井氏が昼食後残って欲しいとのこと、谷本氏と3人で昼食に行く、その後、中井氏の同僚の方も合流される。この方は役場の職員の方で志原川の実環境保全の運動をされている。志原川の別の所へ案内していただく。そこにあったのはまさしく絶滅を危惧される木製の和船である。この舟で川へ出る。準備を始め、同僚の方に船頭さんをして頂いて船出ししてすぐにあの青いキラキラしたカワセミの乱舞である。曇り空と枯れススキのバックで飛ぶカワセミも華麗である。

先の「いったい、どうなってしまうのか？」の続きであるが、まず、河口部ではあるが、熊野灘の荒波によってこぶし大の石ころが河口部に巻き上げられ、これが自

然の波の力で積みあがって現在の状態である。

こんな河口、日本でここだけ？それとも世界で？かな。

そのすぐ上流は、ブッシュと立ち木であり、上流に向って広がっているというような特殊な形である。一番広い所で200mぐらい、中州があり、中州で農業がごく最近まで行われていたとのこと。中州と左岸は素晴らしいアシ原が広がっている、そして、ハマナツメのたもとへ出る。この間約800mこんな川、日本中どこにも無い。この川を中心とした自然と人々の共存も素晴らしい。これからのこの川の持つ危険性は、県が高潮の時に海水が逆流する為に200億もする不粋な箱型の人口干潟を作ろうとしている。（ボックスカルバートと言う）。

大型ポンプ2基で済むはずであるが（1基19億円ぐらいだったかな。）

ボックスカルバートで生態系も狂うかも知れない。

この舟で素晴らしいことが二つ、マスターが極めて舟扱いが上手で船頭さんもビックリである。そして、ついに出たオオタカの志原川ビューティである。マスターいわく一度に5種も猛禽が出る所は無い、と。高さは少し高かったがまさしくオオタカの羽ばたきである。川の中で出た鳥は次の通りである。

バン、カイツブリ、カワウ、マガモ、コガモ、オオタカ、イカルチドリ、ツバメ、イワツバメ、カワセミ、

私達が今日の業を終わるのを待っていたかのように、空は降り出した。

中井氏と船頭さんにお先にと別れを告げ、今日の出会いに感謝しながら、自然と口に出たエニーグレースを口ずさみ帰路に着いた小生であった。

次回は谷本氏と船頭さんが船に乗せてくれるそうです。少し遠いけど行くだけの価値はある所だと思います。次回は自称研究部員で出現するつもりです。

スカイウォーカー熊澤英樹でした。

父さんのジョウビタキ

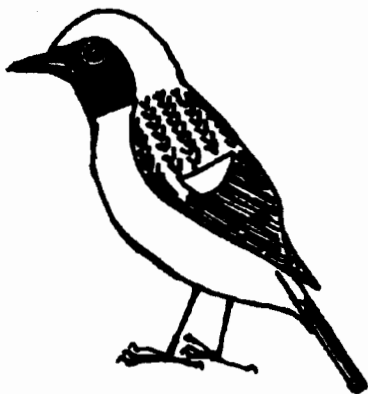
松島雅之

何時の頃からかよく分からないが、秋も深まる頃になると決まって我が家を訪れる鳥がいる。その名前がジョウビタキであることを知ったのは私が日本野鳥の会に入会したここ二年ほど前のこと、そしてその姿の可愛らしさはたちまち私を夢中にさせてしまった。

ところが、私の家族にとって彼女の評判はあまりかんばしくないようだ、はっきり言って嫌われものと言っても過言ではない。

庭に有る紫色のヤマゴボウの実をタラフク食べた彼女は必ず洗濯物のバスタオルの上で休憩、そして駐車場の車のミラー相手に一暴れ。その後は決まって「父さんのジョウビタキが私のバスタオルに・・・」「父さんのジョウビタキが洗車したばかりの僕の車に・・・」と言うわけである。

しかし今年は少し状況が違っているようだ、この夏から北海道に単身赴任している私の所に第一報が着いたのは11月1日「父さんのジョウビタキがやってきたよ」、二、三日姿を見ないと「隣のネコにやられてしまったのでは」と大騒ぎ、挙句の果てには餌台まで作ってしまうほどすっかりアイドルになってしまっている。突然離れて生活することになった家族の間を行き来する彼女、目頭に熱いものが・・・。



(山田 昭子)

みむーの中国通信 (7)

三村 祥子

ニーメンハオ!

みむーです。上海も春節(旧正月)を迎え、新しい年が始まりました。

中国は旧正月を採用しているのでクリスマスが終わった後も1ヶ月位はそのままクリスマスツリーなど飾ったままです。その後、徐々に春節に移っていくのです。今年の春節は2月1日でした。そのため1月の土日のスーパーマーケットはバーゲンやら春節の準備(縁起飾り物)で超満員でした。1月はさしずめ師走といったところでしょうか?

ところで、2008年には北京でオリンピックが、2010年には上海で万博が開かれます。民俗学者の柳田国男が「中国は地形が単調だから散歩に向かないので人工の庭園を作る」と言ったそうですが、私が中国に来てからでも『飛躍地発展』のスローガンの下、街の風景がどんどん変わっています。

『中国のトイレ』と言えばご存知の方もいらっしゃると思いますが、最近のトイレはこちらの方もかなり改善されてホテルの五つ星のようにランク分けされているものも登場。星5つともなると入口には売店や休憩所、軽食コーナーなども完備されています。しかし中心部を離れると扉のないものや目と目が合うもの等昔からのものに出くわすと少々辛いものがありますね。

ちなみに上海は人口1200万人以上、面積は群馬県とほぼ同じです。中心地に近いところに住んでいる私の周りでは都市化が進み、とても鳥の住める環境ではありません。公園があったとしても芝生ばかりで木が無く鳥を見かけませんでした。スズメさえ探すのに苦労します。もっと鳥について書きたかったのですが期待に添えなかったのが残念です。

この中国通信も今回で最終回となりました。長い間稚拙な文章にお付き合いいただきありがとうございました。

謝謝 再見!!!

探鳥会

● 木曾岬干拓地探鳥会 (木曾岬町)

日時：10月27日(日) 9:00~12:00

担当：村田芳雄・近藤義孝

参加者：17名

観察種：ムクドリ、ハクセキレイ、ジョウビタキ、ハイカ、ノリ、トビ、キセキレイ、アオサギ、カワウ、ダイサギ、コサギ、ハヤブサ、スズメ、モズ、ミサコ、カルカモ、ホシハジロ、ユリカモメ、タシキ、クサシキ、アマツハメ、ケリ、イソギ、カイツブリ、ヒトリガモ、カセミ、トバト、キジ、ヒバリ、セグロセキレイ、キジバト、コガモ、チョウゲンボウ、タケリ、ハシホソガラス、ヒヨドリ、ハシブトガラス、メジロ、カラヒワ、シジュウカラ、ウミネ

計 41種

● 松阪森林公園探鳥会 (松阪市)

日時：11月15日(金) 9:30~12:00

担当：宮田たつ・水森和子

参加者：16名(会員13名 会員外3名)

観察種：ツグミ、アオジ、ハシホソガラス、ジョウビタキ、カス、ヒヨドリ、エガ、カラヒワ、コガモ、シジュウカラ、メジロ、ヤマガラ、キセキレイ、ウグイス、キジバト

計 15種

コメント

途中、自然所薯掘りをして見える方と出会った。

● 県民の森探鳥会 (菟野町)

日時：11月23日(土) 9:30~12:05

担当：矢田英史・高 和義

参加者：25名

観察種：アカガラ、ジョウビタキ、ホシロ、ヒヨドリ、メジロ、モズ、アオジ、エガ、シジュウカラ、ウツ、カラヒワ、シハラ、キジバト、トビ、ウグイス、カス、コゲラ、ツグミ、カス(SP)、トバト

計 20種

コメント

- ・見事な紅葉が素晴らしい
- ・自宅の庭で今年コゲラが巣立ったという話があった。

● 五十鈴川探鳥会 (伊勢市)

日時：11月23日(土) 9:00~11:30

担当：山田昭子・林 淳子

参加者：25名(会員16名 会員外9名)

観察種：ツグミ、シハラ、アオサギ、モズ、ホシロ、ヒヨドリ、ヤマガラ、イソギ、ビソズイ、イカル、セグロセキレイ、イカルチドリ、タヒバリ、ハシホソガラス、キセキレイ、カルカモ、ウグイス、ハシブトガラス、カワウ、カセミ、メジロ、コサギ、キジバト、カラヒワ、ムクドリ、カラバト、

計 27種

コメント

初心者対象の探鳥会だったので、マンツーマンで指導ができ、丁寧な観察会ができた

● 木曾岬干拓地探鳥会 (木曾岬町)

日時：11月24日(日) 9:00~12:00

担当：村田芳雄・近藤義孝

参加者：14名

観察種：コガモ、キジバト、ツグミ、ムクドリ、ハクセキレイ、ヒトリガモ、イソギ、ジョウビタキ、チュウビ、オオヨシガモ、ホシハジロ、コサギ、カルカモ、キンクロハジロ、アオジ、ユリカモメ、カワウ、ハシブトガラス、スズメ、ハシホソガラス、チョウゲンボウ、アオサギ、クサシキ、モズ、ホシロ、ダイサギ、ミサコ、オオカラモズ、キジ、ケリ、カイツブリ、タシキ、タケリ、メジロ、ヒヨドリ、タヒバリ、オカガモ、ウグイス、カラヒワ、セッカ、ヒバリ、カセミ、トバト、トビ

計 44種

● 斎宮池探鳥会 (明和町)

日時：12月7日(土) 9:30~11:00

担当：西村 泉

参加者：9名(会員)

観察種：イカル、シハラ、アオジ、ウグイス、カイツブリ、メジロ、ヒヨドリ、ツグミ、エガ、アオサギ、カラヒワ、キジバト、ヤマガラ、ヒトリガモ、ルビタキ、ホシロ、コゲラ、ジョウビタキ、ハシホソガラス、ハシブトガラス

計 20種

コメント

小雨が降り出したので早めに切り上げたが、落ち葉を踏みしめながらの探鳥はのんびり楽しんでいただけではないかなと思います。

● 真泥池探鳥会 (大山田村)

日時：12月8日(日) 10:00~12:00

担当：谷本勢津雄・塗矢博一

参加者：6名(会員4名 会員外2名)

観察種：クサシキ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、キセ

イ、カセミ、イカルドリ、ホシジロ、カカモ、マガモ、ハシブトガラス、ヤマガラ、カウ、カイツブリ、ツグミ、キンクロハジロ、コガラ、エガ、メジロ、アオジ、ジョウビタキ、シハラ、ヒトリ、トラツグミ、カラヒワ、ウグイス、スズメ、シジュウカラ、キジバト、ヒガラ、
計 29種

コメント

真泥池のカモが他の池の方へいている。金網の張るのが遅くて村の鳥のオシドリが来るのはいつのことやら。この場所でトラツグミは初でした。

●穴川探鳥会（磯部町）

日時：12月8日（日）9：30～12：00

担当：今村 禎・林 淳子

参加者：26名（会員23名 会員外3名）

観察種：ジョウビタキ、カラヒワ、ヒトリ、イビヨドリ、ツグミ、ヒトリガモ、タヒバリ、ヨシガモ、アオジ、ホシジロ、スズメ、メジロ、アオサギ、ミサコ、カセミ、ムクドリ、ウグイス、チュウビ、トビ、キンクロハジロ、カイツブリ、ハシブトガラス、ダイサギ、マガモ、カウ、カカモ、バン、オカガモ、セグロセキレイ、コガモ、イソギ、キジバト、モズ、カラバト、ハヤブサ

計 35種

コメント

天気は曇りで風がなかったため、思ったより寒くなく探鳥会ができました。大きなボラをつかんで飛んでいくミサゴから始まり、ツグミをはじめとする冬鳥、養魚池のカモ類、最後にはチュウヒやハヤブサまで観察することができて良かったと思います。

●木曾岬干拓地探鳥会（木曾岬町）

日時：12月22日（日）9：00～12：00

担当：村田芳雄・近藤義孝

参加者：23名

観察種：ハヤブサ、ハシブトガラス、ノスリ、アオサギ、カカモ、オカガモ、ホシジロ、ユリカモメ、キンクロハジロ、ダイサギ、コチヨウゲンボウ、ミサコ、チュウビ、コガモ、ハクセキレイ、トビ、ヒバリ、タゲリ、ツグミ、トビカラヒワ、ハイロチュウビ、キジ、ヒトリガモ、ゴイサギ、アオジ、オオカラモズ、ウグイス、ヒトリ、ジョウビタキ、モズ、ケリ、カウ、セグロセキレイ、ハシブトガモ、タシギ、クサギ、イソギ、シジュウカラ、メジロ、ムクドリ、タヒバリ、ハシブトガラス、スズメ、キジバト、オシジュン

計 46種

コメント

オオカラモズとかハイロチュウヒとか珍しい鳥が見られることがあります。他の猛禽類も出ているので見に来てください。

●安濃ダム探鳥会（安濃町）

日時：12月23日（月）10：00～12：00

担当：平井正志・岡八智子

参加者：37名

観察種：セキレイ、イビヨドリ、シジュウカラ、カセミ、クマタカ、カカラス、モズ、ベニマシコ、ホシジロ、オシドリ、カウ、セグロセキレイ、マガモ、ジョウビタキ、カラス類

計 15種

コメント

ダムでオシドリを見たあと、上流の「落合の郷」へ移動、場違いなイソヒヨドリに遭遇、クマタカのつがいが上空を舞った。クマタカは何度も現れ、斜面の木に止まり、全員でクマタカを堪能することができた。散会后、湖水荘で交流会を兼ねた食事、その後有志で安濃川の現状を見た。

●員弁川探鳥会（員弁町）

日時：1月11日（土）9：30～12：00

担当：近藤義孝・村田芳雄

参加者：20名（会員14名 会員外6名）

観察種：カイツブリ、カウ、アオサギ、オオカ、ケリ、タゲリ、クサギ、イソギ、キジバト、カセミ、ヒバリ、セキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒトリ、モズ、ジョウビタキ、シハラ、ツグミ、エガ、シジュウカラ、メジロ、ホシジロ、カラダカ、アオジ、カラヒワ、ベニマシコ、イカル、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ハシブトガラス

計 32種

コメント

毎日、見ているフィールドだけど、そんなに種類は観察できないのではないかと心配していました。

しかし、20人の人に参加してもらおうと眼も多くなり、32種類も観察できました。員弁川では比較的良好に見られる河岸林は上流から河口までの緑の回廊として大切なものなのかと思いました。

イベント情報

☆三重県内でネイチャークラフトやそれ以外の自然体験の指導を実際に行なっている方を対象に、ネイチャークラフトを教えるポイントやコツについて、長野修一氏を講師にお迎えし、講演会や講義等を行います。

内容：講演会（テーマ「くらしの中のネイチャークラフト」）と交流会
 日時：H15年3月14日（金）19：00～20：30
 場所：奥伊勢フォレストピア 宮川山荘 多気郡宮川村大字菌993
 申し込み：不要 参加費：無料 TEL 05987-6-1200
 主催：三重県 共催：奥伊勢フォレストピア

☆楽しくエコクッキングしましょう！

環境に配慮し、食材の購入時から料理方法、そして、エネルギーを大切にすること、水を汚さないこと、ゴミを減らすこと・・・そんなことを当たり前に取り入れながら、地球にやさしく、毎日、おいしく料理を作りましょう。

メニュー：豪華にパーティー風
 海苔巻ビビンバ・ピーマン前菜風サラダ・ほうれん草のキッシュ・一口ケーキ

日時：H15年3月26日（水）10：00～12：00
 場所：三重県環境学習情報センター内
 定員：30名（小学校4年生以上～大人まで）
 参加費：1人500円（材料費のみ）
 講師：四日市ヘルスメイト
 持ち物：エプロン・三角巾・お箸・入れ物
 〆切り：3月19日（水）申し込み順優先
 申し込み：三重県環境学習情報センター 〒512-1211 四日市市桜町3690-1
 主催：三重県環境学習情報センター TEL 0593-29-2000・ fax 0593-29-2909

編集後記

家のベランダの前に池がある。結構大きな池だが、団地の中で周囲に遊歩道があるせいか、時々、マガモやカイツブリが混じることはあるが、目につくのは大抵はカルガモばかりである。

このベランダ下の土手の周辺をテリトリーにしているジョウビタキがいる。広辞苑よると、ジョウビタキは人を恐れないで近くに来るので、別名バカビタキとあった。いつも綺麗な姿を見せ、心なませてくれるのにもう少し、ましな名前はなかったのかと思う。

M・M

しろちどり 第38号 2003年2月発行

題字 濱田 稔
 表紙絵 高 和義
 挿絵 山田 昭子
 編集 三村 通雄

〒
 発行者 (財)日本野鳥の会 三重県支部
 〒516-0026 伊勢市宇治浦田2丁目9-4
 杉浦 邦彦方

印刷 館印刷
 〒510-1321 三重郡菟野町田口
 1903-3

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。●